

# 文末の「のだ」の意味に関する認知言語学的・語用論的研究：文末の「ものだ」との対照を中心に

范, 碧琳

<https://doi.org/10.15017/1654599>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名	範 碧琳			
論 文 名	文末の「のだ」の意味に関する認知言語学的・語用論的研究 一文末の「ものだ」との対照を中心に―			
論文調査委員	主 査	九州大学	教 授	松村 瑞子
	副 査	九州大学	教 授	山村 ひろみ
	副 査	九州大学	准教授	西山 猛
	副 査	九州大学	教 授	松永 典子
	副 査	名古屋大学	教 授	杉村 泰

## 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、認知意味論と語用論の視点から「のだ」「ものだ」の意味論的意味と語用論的意味を考察し、意味拡張のプロセスを明らかにすることで、日本語学習者にとって理解しやすい記述を行ったものである。論旨も明快でオリジナリティーも高く、今後日本語学および日本語教育研究の分野において高い価値をもつ論文であると考えられる。

本論文では、先ず『CD-ROM版新潮文庫の100冊』から収集された用例を、認知意味論・語用論の視点から「のだ」「ものだ」の意味と用法を分析することで、それぞれの意味ネットワーク、機能及び両者に共通する用法の相違点を明らかにした。次に、『中日対訳コーパス』から「のだ」「ものだ」に対応する中国語の用例を収集し、その対応にはどのような傾向があるのかを明らかにした。最後に、中国の日本語教育現場で使用されている日本語教科書の問題点を指摘し、「のだ」「ものだ」を教授する時に注意すべきポイント、教授法への提案をまとめた。

本論文は7章から構成される。詳細は以下の通りである。

第1章～第3章では本研究の目的、先行研究、データ、理論的枠組みと研究方法について詳述した。

第4章では、認知意味論と語用論の視点から「のだ」の意味・機能について分析した。まず、「のだ」の辞書的意味と先行研究を参照しながら、認知言語学的アプローチによって、「のだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を確定し、各意味間の拡張プロセスを考察した上で、「のだ」の多義構造を明らかにした。次に、「のだ」が「命令」「決意」と解釈される語用論的条件を解明し、さらに「強調」「告白」「教示」などの語用論的意味、機能についても考察した。その結果、「のだ」の「ある事象を既定の事象として客体化し、それを話し手の断定・主張として提示する」(拡張義 3)という意味論的な意味が、語用論的な要因や条件と結びつくことによって、様々な語用論的な意味が生じてくることが判明した。さらに、「のだ」が終助詞「よ」と共起する時の機能について分析し、「のだ」+「よ」は聞き手向けの機能をさらに強化する効果、話し手の認識、判断を聞き手に明確に提示する機能と命令の気持ちを和らげる機能をもっていることを明らかにした。

第5章では、認知意味論と語用論の視点から「ものだ」の意味を分析した。まず、「ものだ」の辞書的意味と先行研究を参照しながら、認知言語学の理論的枠組みに基づき、「ものだ」のプロトタイプの意味と各拡張義を確定し、「ものだ」の複数の意味の拡張ネットワークを示した。また、「解説」の「ものだ」はプロトタイプの意味とその拡張義から派生されたものではなく、「～たものだ」の形をとっている名詞述語文の「ものだ」から構文的に派生されたものであることが確認された。

さらに、「ものだ」の「当為」「詠嘆」「教示」の語用論的意味について考察し、「ものだ」の「ある事象を一般的にこうであるという存在として客体化し、それを話し手の判断・主張として提示する」というプロトタイプの意味が語用論的な要因や条件と結びつくことによって、様々な語用論的意味が生じてくることが判明した。最後に、「のだ」と「ものだ」の類似する意味・用法について考察し、その共通点と相違点を明らかにした。

第6章では、「のだ」「ものだ」に対応している中国語について詳しく考察し、教授法の改善を提案した。まずは、「のだ」に対応する中国語の傾向、およびその表す語気を分析した。「のだ」に対応する中国語は無標識になることが多いが、対応できるものは主に「確信語気」、「命令・願望語気」、「意志・願望語気」、「必要語気」などを表す形式、または語気副詞、語気助詞とその他の形式(接続詞、副詞)であることが分かった。次に、「ものだ」に対応する中国語の傾向、およびその表す語気を分析し、同じく無標識になることが多いが、対応できるものは主に「確信語気」、「意外語気」、「詠嘆語気」、「必要語気」などを表す形式であることが判明した。さらに、中国の日本語教育現場で使用されている教科書を調査し、「のだ」「ものだ」の提示の仕方とその問題点を明らかにした。その上で、中国の日本語学習者に「のだ」「ものだ」を教える時に注意するポイント、教授法への提案をまとめた。

終章である第7章では、本論文の内容のまとめ、意義、今後の課題について述べた。

本論文は、認知言語学的アプローチと語用論の視点から、「のだ」と「ものだ」の意味拡張ネットワーク、機能を明らかにした後、その結果に基づき、両者と中国語語気体系の対応の傾向を示したものである。「のだ」「ものだ」の研究に新しい方法論の可能性を提供することができたことに対して大きな意義が認められる。さらに、本研究を発展させれば「のだ」「ものだ」の効果的な教授法の開発に繋がると期待できる。よって、論文調査委員会は本論文を博士（比較社会文化）の学位に値すると判断した。